

目 次

はじめに	1
平和学習広島・長崎派遣プログラムについて	2
参加者・保護者説明会	3
事前学習 1 日目、事前学習 2 日目	4
平和学習広島派遣プログラム行程	5
平和学習長崎派遣プログラム行程	7
派遣者報告（A 班：広島）	10
派遣者報告（B 班：広島）	18
派遣者報告（C 班：広島）	26
派遣者報告（D 班：長崎）	34
派遣者報告（E 班：長崎）	42
派遣者報告（F 班：長崎）	50
引率者感想	58

はじめに

藤沢市は、１９８２年（昭和５７年）に「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」、１９９５年（平成７年）に「藤沢市核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」を制定し、核兵器の廃絶、恒久平和の実現に向けて、公募市民で構成する「平和の輪をひろげる実行委員会」と協働で、さまざまな平和事業を進めております。

未来を担う児童・生徒を対象に実施する平和学習事業は、１９８７年（昭和６２年）、広島市に小中学生を派遣する「平和ツアー」として始まりました。２００２年（平成１４年）からは、訪問先を長崎市とした「平和学習・長崎派遣事業」となり、２０１１年（平成２３年）からは、「親子記者・広島派遣事業」を加え、被爆地を訪問し、被爆の実相や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学ぶ機会として実施してまいりました。

そして、２０２３年（令和５年）には広島派遣についても、小学生から大学生までの青少年を対象とする形態に改め、事前学習会から報告会までの体系的な学習プログラムとして、今年度は広島・長崎各２１人計４２人の青少年を派遣しました。

派遣者のみなさんは、広島・長崎への派遣を通じて、多くのことを学んできたことと思います。被爆者をはじめ、多くの戦争体験者が高齢化している現状を鑑みると、私たちは知るだけでなく、知ったことをより多くの人に伝えていかねばなりません。

今後も、この地球上からすべての核兵器をなくし、子どもたちの笑顔があふれる安心で平和な世界の実現に向け、市民の皆様とともに「平和の輪」をひろげる取組を行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

藤沢市長 鈴木 恒 夫

平和学習広島・長崎派遣プログラムについて

令和6年度平和学習広島・長崎派遣プログラムでは、被爆地での学びをより深め、有意義なものとするため、参加者・保護者説明会では、基調講演などを実施したほか、事前学習会では平和の輪をひろげる実行委員を講師に原爆や平和に関する基礎を学ぶ機会としました。

広島派遣では、平和記念資料館の見学や被爆体験講話、被爆電車への乗車体験などにより被爆の実相を知るとともに、被爆体験伝承者の活動に関する講演や広島市立大学の学生の案内による班別自由学習を通じて、平和の継承に向けた取組について学びました。

長崎派遣では、原爆資料館の見学や平和案内人による被爆遺構を見学するフィールドワークを実施し、原爆の恐ろしさを知るとともに、長崎市が主催する青少年ピースフォーラムに参加し、長崎市のピースボランティアの学生や全国から派遣された青少年との交流や意見交換を通じて、平和への学びを深めました。

派遣後は、9月15日（日）の「第8回平和の輪をひろげるつどい」の中で、班ごとに派遣報告を行い、11月19日（火）から27日（水）までの期間に「平和学習広島・長崎派遣プログラム報告展」で、一人ひとりが被爆地で学んだことをまとめた報告書を展示しました。

○藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言

昭和 57 年 6 月 22 日

告示第 29 号

わが国は、世界で唯一の核被爆国であり、核兵器廃絶と恒久平和の実現は全国民共通の願いである。

しかし、すでに地球上には多くの核兵器が貯えられ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

藤沢市は、日本国憲法に基づく国の平和と安全こそが、地方自治の根本的条件であることにかんがみ、非核三原則が完全に実施されることを願い、核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え、この人類共通の大義に向かつて不断の努力を続ける核兵器廃絶の平和都市であることを宣言する。

参加者・保護者説明会

● 基調講演

「被爆者の証言を軸に〈被爆〉と〈復興〉そして〈継承〉について考える」

多摩大学グローバルスタディーズ学部 桐谷 多恵子専任講師



● 令和5年度参加者の声

広島派遣参加者 井上 朔さん

長崎派遣参加者 矢澤 治大さん

● 「平和学習広島・長崎派遣プログラムへの参加に向けて」

平和の輪をひろげる実行委員会 久保 光輝委員

《資料より抜粋》

伝えることの大切さ

- ・ 被爆者は平均85.58歳
→ 「知る世代から、知って伝える世代へ」
- ・ 戦後80年が目前に迫り戦争が遠い昔の話になりつつある
→ 風化させないためには「身近な人の話」が大切

伝えるために

テーマをもって参加してほしい

「原爆が落ちる前の広島や長崎はどんな街だった？」

「原爆で広島や長崎の子どもはどんな被害を受けた？」

「被爆者はいま、何を思っている？」



事前学習 1 日目

- 「原爆の基礎知識について」

平和の輪をひろげる実行委員会
持田 早苗委員、安岡 千絵里委員



- 平和メッセージの作成

平和の輪をひろげる実行委員会 益子 悦子委員

事前学習 2 日目

- 動画視聴と班別ミーティング

広島派遣

- ・ 動画視聴

「92 歳 原爆の記憶 被爆電車に刻まれた初恋『好きな人をそばに乗せて…』」
(HOME 広島ニュース)

長崎派遣

- ・ 動画視聴

「ピースブックリレー (Produced by 長崎クスノキプロジェクト)」
(長崎市)

- 班別学習目標発表

- 「平和の種を集め未来を共に創る」

平和の輪をひろげる実行委員会 長澤 パティ 明寿委員



平和学習広島派遣プログラム行程

2024年（令和6年）8月5日（月）～7日（水）

1

日目

8月5日（月）

- ・ 平和セレモニー（平和メッセージ）（原爆の子の像）
- ・ 平和記念公園、平和記念資料館見学
- ・ 被爆体験講話「三度許すまじ原爆を」（講話者：梶矢 文昭さん）

新横浜駅 =  = 広島駅 =  = 土橋 =  = 平和記念公園 =  = ホテル会議室 = ホテル（泊）

2

日目

8月6日（火）

- ・ 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）参列
 - ・ 被爆体験伝承者による講話（講師：保田 麻友さん）
 - ・ 広島市立大学平和活動サークル「S2」案内になるフィールドワーク
- ※班別自由学習

ホテル =  = 平和記念式典 =  = ホテル =  = フィールドワーク =  = 原爆ドーム前（元安川とろうろ流し） =  = ホテル（泊）

3

日目

8月7日（水）

- ・ 講演「原爆と被爆電車」（講師：加藤 一孝さん）
- ・ 原爆ドーム見学
- ・ 被爆電車乗車体験

ホテル =  = 広島国際会議場 =  = 原爆ドーム前 =  = 広島駅 =  = 新横浜駅

講師紹介

梶矢 文昭さん：1939 年（昭和 14 年）広島市生まれ。小学 1 年生のときに広島駅近くで被爆。1962 年（昭和 37 年）から広島市で小学校教諭や校長を務める。2001 年（平成 13 年）に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足し、事務局長に就く。令和に入ってから、財団法人広島平和文化センターの被爆体験証言者として「三度許すまじ原爆を」を伝える活動を行っている。

保田 麻友さん：大学生の頃にとろう流しのボランティアに参加。翌年、施設等に入居・通われている被爆者の方々にとろうを書いていただき、代わりに 8 月 6 日に流灯する活動として、Peace Porter Project を立ち上げる。社会人になり、2012 年（平成 24 年）から広島市の事業「被爆体験伝承者」に参加、当時最年少の伝承者 1 期生として、広島県内外の学校や大学、社会人の団体等に向けて講演活動を行う。

加藤 一孝さん：1949 年（昭和 24 年）広島生まれ。高校教員を経て 1980 年（昭和 55 年）広島市こども文化科学館元館長。現在、日本路面電車同好会中国支部代表、広島国際学院大学評議員、比治山大学講師等。

◎平和学習広島派遣プログラム 平和メッセージ文

A 班

戦争・暴力のない世界を目指し、平和の重要性を伝える責任をもとう。

B 班

平和とは、争いがなく、誰もが自由に生きられることだと思います。
平和な世界を実現するために、命の尊さを知り、伝えていきましょう。

C 班

多くの命と日常が一瞬にして奪われたあの日、同じ過ちを二度と繰り返さないため、私たちは平和について考え続け、未来へと繋いでいきます。

平和学習長崎派遣プログラム行程

2024年（令和6年）8月7日（水）～10日（土）

1

日目

8月7日（水）

- ・城山小学校（被爆校舎）見学
- ・平和セレモニー（平和メッセージ）（原爆落下中心地公園）

藤沢市役所＝＝羽田空港＝＝長崎空港＝＝城山小学校＝
＝原爆落下中心地公園＝＝ホテル（泊）

2

日目

8月8日（木）

- ・平和案内人との被爆遺構や原爆資料館フィールドワーク
- ・青少年ピースフォーラム（被爆体験講話、ワーク、交流会等）
被爆体験講話（講話者：松尾 幸子さん）

ホテル＝＝被爆遺構＝原爆資料館（青少年ピースフォーラム）
＝＝ホテル（泊）

3

日目

8月9日（金）

- ・被爆79周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典（平和記念式典）参列
及びオンライン視聴
- ・青少年ピースフォーラム（意見交換）

ホテル＝＝原爆落下中心地公園＝平和記念式典参列・出島メッセ中継
視聴＝＝班別にて昼食＝出島メッセ（青少年ピースフォーラム）＝
班別学習＝ホテル（泊）

4

日目

8月10日（土）

- ・稲佐山見学

ホテル＝班別自由学習＝＝稲佐山＝＝長崎空港＝＝
羽田空港＝＝藤沢市役所

講師紹介

松尾 幸子さん：国民学校 5 年生 (11 歳) の時、爆心地から 1.3km 離れた場所で被爆した。本人は無傷だったが、弟達は怪我や火傷を負った。0.7km 地点にあった自宅は跡形もなく焼けてしまい、姉の骨だけが出てきた。倒壊した建物の下敷きになった父は 8 月 28 日に亡くなり、兄 2 人、姉、兄嫁、叔母 2 人も亡くなった。核兵器の廃絶と平和の尊さを訴え続けている。

◎平和学習長崎派遣プログラム 平和メッセージ文

D 班

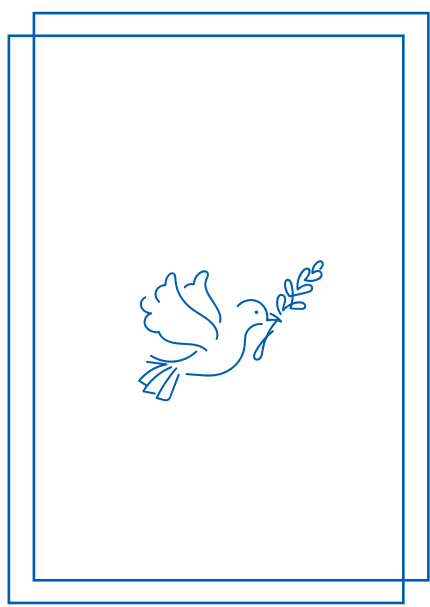
日常の大切さを知り 世界中の人々の心が一つになる瞬間のために日々を大切にしよう

E 班

思いの数だけ平和がある 今という時を大切に生きよう

F 班

平和とはすべての人が平等に 当たり前な日常を 不自由なく過ごせることだと思う 戦争が残した悲惨な事実を学び 唯一の被爆国として 次の世代に語り継いでいくことが 平和に対する責任だと思う だからこと 私たちは 平和への学びを続けていきたい



A 班（広島）



ユースリーダー 塚谷 佳
班長 アンマック 英子
加藤 晴
渡邊 美華
小原 愛椛
松田 健吾
加藤 蒼乃香

今回の派遣の『意義』を考える

これからこそ、私はこの派遣の「意義」が試されると考えます。被爆者の方々の高齢化に伴い、実際の声を聴く機会が減少しており、将来的には、そうした機会はなくなると言えます。実際に私たちに講演してくださった梶矢さんも、現在ガンを患っていると言います。こうした背景から、戦争の惨禍を忘れ、平和を脅かす状況がさらに加速することが危惧されています。だからこそ、今が「正念場」であると考えます。これからも被爆者が感じた惨状や「平和が第一」という現代の社会規範を相違なく次世代に伝えていき、確実なものにしていかななくてはなりません。後世の世界を担う私たち学生が、この派遣を通して感じたことを胸に、どんな状況においても、争いや差別を忌み嫌い、平和への意識を一層強めることが大切です。こうした姿勢を生涯にわたって貫き、藤沢市民として、そして地球市民として共有し、平和に貢献することではじめて、この派遣の「意義」が最大化されていくと考えます。

藤沢市の学生たちと共に未来の平和について考える機会を求めているからだ。この機会を通して、次世代の平和に対する意識を高め、具体的な行動に繋げたい。ここで得られる知識と経験を通じて、自分自身の平和への理解をさらに深めるとともに、暴力を忌み嫌い、平和を追求できる人材へと成長していきたい。また、来年から社会人になることで、学べる機会や時間が減ることを考えると、この貴重な経験を大切にしたいと強く感じている。

私の平和宣言

全ての人が望むような平和を考えていく

派遣報告

わからなくても

私が今回のプログラムに参加した目的の一つに、平和とは何なのか、そしてその平和を実現させるために私には何ができるのかを知る、ということがあった。これらは今までに幾度となく訊かれ、その度に、私が納得のいく答えを出せずにいた問いである。

「分かん。」これは、私たち参加者からの「平和とは何か」という質問に対する被爆者の方が一番始めに発した言葉だ。原爆がひどい、良くないと熱くお話をされていたのに静かに、ただ一言述べたその瞬間がとても印象に残っている。答えを探し求めていた身としては非常に呆気ない気持ちもあった。しかし、確かに人・時・場所など、あらゆる要素によって答えが変わってしまう可能性があるからこそ、分からないとしか言いようがない問いだとも思う。「分かんから考えて考えて考えることが大事だ。」二言目はそう言っていた。結局のところ、私は平和について考えること、またその過程が大切だという結論に至った。そしてそれは人生においても同じことが言えると考えた。

私は今、卒業後の進路について悩んでいるが、解のない中考え続けることで、将来に向けて確実に一歩ずつ歩みを進めていけたら良いと思った。

応募理由

私の周りには、被爆者も原爆について語る人もいなかったため、私は原爆についてどこか現実味のなさを感じていた。しかし、学校の現地研修で長崎を訪れた際に、初めて被爆者から直接話を聞く機会があり、私は私の立場でも原爆について海外・後世へと伝えるため知識を深めたいと思った。また、このプログラムでは他の次世代を担う人と平和について対話できて、今後目指す平和のヒントになると考えたから。

被爆者の思いを世界に伝える

三度許すまじ原爆を世界の町に

平和学習広島派遣プログラムに参加し、様々なことを感じた。まず平和記念式典について。この日には多くの外国人が来ていた。外国人もひろしまについて興味をもっていることがわかった。当日はとても暑い日だった。汗が止まらなかった。79年前に暑い季節の中、原子爆弾による熱などで死んでしまった人がいると思うとあまりの悲惨さに「暑い、暑い。」と言ってしまった自分が恥ずかしかった。

この平和学習広島派遣プログラムの中で最も印象的だったのは被爆者の梶矢文昭さんの話だ。特に原子爆弾が落ちたときの様子を表した「ピカ・ドン」という言葉はインパクトもあり、重みもあるように聞こえた。梶矢さんは「三度許すまじ原爆を世界の町に」という思いを伝えてくれた。被爆者の高齢化が進み、被爆者の生の声が聞けない環境になってきている。思い出したくもないであろう当時の話を私たちに話してくれた貴重な体験をさせてもらったのであるから、私たちは梶矢さんの思いを世界に伝える責任があるのではないかと思った。今後も平和の輪を広げる活動を広げていきたい。

唯一の被爆国である日本の国民として、被爆について知っておくべきであり、海外の人にも被爆について伝えていくことが、日本人の使命ではないかと思ったからです。なぜなら、今も世界では戦争が起きていて、再度核兵器が使われる可能性があるからです。戦争についてテレビや教科書で学んだことだけではなく、現地で知ることを生かして、今後二度と同じような悲劇が行なわれないように世界に広めていきたいからです。

広島が世界に伝えている事

今の世界には 12,121 の核兵器があると言われています。そのうちの 1 つでも使ってはいけないことを、広島が世界に伝えていると思います。原爆死没者慰霊式・平和記念式典には多くの人が会場にいて、その中には外国の方もたくさん居て、広島が世界中から注目されていると思いました。原爆は一瞬で世界を壊し、世界を灰色に変えてしまう。原爆を落とされたことで人々は家族をなくし、原爆を落とされた後も病などに苦しまされトラウマを抱え後悔してずっと死んでも、その苦しみ忘れられない人がいる。さらに放射線の被害を受けた人がいると聞いて一瞬で多くの命を奪うだけでなく、落とした後もずっと被爆者やその家族を苦しめると思いました。日本は唯一の被爆国としてよく世界に注目されます。被爆した日本をみても、原爆がなくなる現実が今あります。次原爆が使われれば広島より強い威力でさらに大きな被害が多く、生まれます。だから、これからも原爆の怖さを広島が伝えていてほしいと思います。

小学生の時、図書室で『まっ黒なおべんとう』、中学 1 年生の国語の教科書『大人になれなかった弟たちに…』を学習したことで当時の人達の悲しみや、川の様子のお話を知りました。

また、私のひいひいおじいちゃんは海軍の少将で、広島で原爆によって亡くなったそうです。とても身近に感じ 1 度広島に足を運び、現地でしか見れないことと忘れられないことを学びたいと思いました。

一人一人が優しい気持ちを持ち続ける

平和について語り継ぐこと

私達が生まれるずっと昔に広島、長崎でどのような悲劇が起きたのか、実際に自分の目で見て調べたいと思い平和学習に参加しました。

実際に原爆ドームや平和記念資料館などを見て、一発の原子爆弾により多くの尊い命が奪われ、生き残った人々の生活も変えてしまったことを知りました。また、被爆体験講話では貴重なお話を聞くことができ、被爆された方々の苦しみや悲しみを知ることができました。話を聞き学ぶことはできてもその時のことを想像することしかできません。幸せな生活を一瞬にして奪った戦争は二度としてはいけないと強く思いました。

私が今回学んだことは平和は当たり前ではなく昔の戦争などの経験があるから今があるという事。この広い地球で今も戦争で苦しんでいる人がいます。今回の体験で学んだ事を友達や家族に伝え、これからも平和について学習し自分にできることを考えていこうと思います。

私は小さい頃家族で火垂るの墓という原爆の映画を見ていました。広島、長崎の原爆について昔から興味があります。私たちが生まれるずっと昔に広島長崎でどのような悲劇が起きたのか、実際に自分の目で見て、調べたいと思い参加したいと考えました。実際に体験談を聞き、資料館や平和記念公園、原爆ドームをみることで、当時どのような悲しい出来事が起きていたのか、体験した方がどのような辛い思いをしたのかを知りたいです。

被爆者の言葉を胸に未来へ

これから僕らができること

広島で多くのことを学びましたが、その中で強く印象に残っていることは2つあります。1つ目は、平和記念資料館です。資料館では、皮ふとは思えないほど火傷した人の写真や、黒焦げで元の形さえ分からない物、影しか残らなかった「人影の石」などがありました。生活していた人の命や暮らしが奪われたことを、改めて知りました。2つ目は、2人の講演です。1人目は被爆体験者の梶矢さんです。梶矢さんは、「世界には1万発超の核兵器があるとされるが、絶対に使ってはいけない」と強く言っていました。また、「もし日本が戦争をしそうになった時には、反対の声をあげるのが君たちにできること」とも教えてくれました。2人目の保田さんは、「平和」とは人によって違うと話してくれました。保田さんにとっての「平和」は「いじめのない世界」、僕にとっては「今の生活が当たり前が続くこと」です。お互いの違いを認め合うことが、平和への第一歩につながると思いました。

平和への学びはここで終わりではなく、これからもずっと続けていこうと思っています。

去年の国語の教科書の「たずねびと」を読んで、広島に原爆が落されたことを初めて知りました。ぼくは、市民をまきこみ、街をはかいし、後いしょうをのこすことを知り、とてつもなくショックを受けました。二度と戦争は起こしたくない、世界のだれもが、原爆を使わないようにしたいと、ぼくは強く思っています。そのために、今、ぼくが出来る事は何かを見つけないので、今回のプログラムに応募しました。

私の平和宣言

「平和」というものを考え続ける。

派遣報告

平和への歩み

「なぜ人は争うのだろう…？」私は、初めて平和学習に参加し、改めてこのぎもんを持ちました。特にそう感じたのは、平和記念資料館を見学したときです。資料館には黒くこげたお弁当箱、焼野原を歩く皮ふがただれた人たちの絵、という、たくさんの展示を見て、「戦争や原爆で、こんなにたくさんの人が辛い思いをしたのに、なぜ世界では、戦争が起きていたり、たくさんの原爆があったりするんだろう。」と思いました。原爆が落ちる前は、何気ない幸せな日々を送れていたのに、たった一つの爆弾が、そんな日々を奪ってしまったのです。また、終戦後も放射能によって、たくさんの方が苦しみました。

私は、平和学習を通して自分が学んだことを、一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。そして、自分なりに、世界を平和にする一歩を歩いていきたいです。

応募理由

なぜ、世界で戦争は起こるのか、また戦時中の日本人は、どんな思いで武器を持ったのか、それらが知りたくて私は応募しました。予想することはできるし、インターネットや本で調べられるけど、実さいに行って、経験した人の話を聞いたりした方が私は分かる気がしました。きっとお話はざんこくだけど、「知りたい」という気持ちがとても強かった。これが「理由」です。

B 班（広島）



ユースリーダー	萩原	光志朗
班長	及川	絢奈
	近藤	堇
	梅津	虎玄
	稻葉	菜那子
	松田	将吾
	塚田	凜々

私の平和宣言

自己と他の幸せを願う

派遣報告

平和に向けて私たちができること

広島に原爆を落とした爆撃機「エノラ・ゲイ」。その名前の由来は、機長の母親の名前であり、彼は生涯原爆を落としたことを肯定し続けた。講演者の加藤氏からこの話を聞いた時、私は平和の難しさを感じた。日本からすれば到底理解できない話だが、戦況が悪化しても降伏をしない日本に対し、本土決戦を避ける為に原爆の使用は致し方なかったとの見方もできる。決して甚大な被害をもたらした原爆の使用を認めるわけではないが、それぞれの正義のために戦っている中で、戦争は善と悪のような二元論的な話では片付けることはできず、平和という課題の大きさを改めて感じた。

では、そうした中で私たちには何が出来るだろうか。私は、課題の分離をして身近な部分から変えることが大切だと考える。被爆者の梶矢氏も仰っていたが、戦争や原爆の撲滅などの大きな目標を掲げるのも大切だが、まずは他人の考えを理解し、尊重し合えることが最も重要だ。そのような誰しもができる小さなことの積み重ねが平和の実現という人類最大の目標達成への一歩になると私は思う。

応募理由

私が希望する理由は、戦争を正しく知ることによって平和についての考えを深めるためだ。戦争や核兵器については、学校で学習してきたが、その内容のほとんどが過去の歴史としてしか扱わず、平和について考える機会は少なかった。たしかに日本は現在戦争をしていないが、世界では現在も戦争が起こっていて日本も他人事ではない。そのため、現地に行き、当事者の話を聞き、自分の目で見ると生きた情報を基に平和について考えたい。

知る責任、伝える責任

広島派遣で最も印象的だったのは、平和記念資料館で見た「黒い爪」だ。それは、指先の負傷が原因で変色、変色した爪で、分厚く湾曲していた。提供者に再び正常な爪が生えることはなかったと知ったとき、私は初めて、原爆が人々の体を蝕み続ける事実を理解した。その被害の甚大さゆえどこか他人事に感じていた原爆を心から「怖い」と思い、過去を語り継ぐ責任を実感できた瞬間だった。

私は、唯一の被爆国を祖国にもつ者として原爆を学ばねばと思っていた。しかし、8月6日、広島で多くの外国人を目にしてこの考えは覆った。過ちを繰り返さないためには、日本だけでなく世界中が原爆を学ぶ必要があるのだと改めて気がついた。

これらの経験から、平和な世にするためには世界中が原爆を「今向き合うべき問題」と捉えることが必要だと考える。そのために今私にできることは、学習を続け、広島で感じたことを周囲に伝えることだ。そして、私にとっての「黒い爪」のような、誰かが原爆を意識するきっかけになることを目標に日々精進したい。

私がこのプログラムへの参加を希望する理由は、水木しげる氏の漫画「総員玉碎せよ！」を読み、新たな意志が生まれたからだ。太平洋戦争への出征を経験した作者が描く残酷な光景は脳裏に焼き付き、「戦争を忘れてはならない」と強く感じた。私たちは、大人から平和の尊さを教わった。この漫画を読み、私もそれらを次世代へ繋げなければという使命感が芽生えた。そのためにも、このプログラムから貴重な学びを享受したいと考える。

生きる力を心に刻む

広島から私達へ

私は広島を通して自分と平和へのつながりを見つめ直すことができました。

初めて自分の目で見た原爆ドームや灯籠流しは心を打たれるように強い印象を受けました。青い空の下にある原爆ドームは、多くの人が苦しんだ事実を体で感じ、灯籠流しでは一つ一つの灯籠に思いがあることに、生きるという命の尊さに感銘を受けました。原爆が落とされたあの日から忘れずに伝え続ける広島の姿と人々の思いは私に生きる力の大切さを伝えてくれる素晴らしいものでした。

戦後から七十九年が経ちました。原爆が落とされてから七十九年も経ちました。戦争、原爆により多くの人が苦しみ犠牲となり、生きたいという力をなくした人もいます。戦争は心も感情もなくしてしまうほど恐ろしいものです。私は日本が原爆を落とされた最初で最後の国であって欲しいと思います。そのためには、私達一人一人が過去についてしっかりと学び、平和について考え続けることが重要です。そして、「生きる力」「命の尊さ」を心に刻みながら毎日を生きてゆくことが私達にできる平和への一歩です。

私はテレビや教科書で見た日本の姿がとても印象に残りました。町に家が1つもなく焼け野原になっている姿は今まで見て来た日本とは全く違いました。また、私と同じぐらいの子が働いていたり、家族と離れて暮らしていたり、私の普通とは違う生活でした。戦争の怖さを知っている日本だからこそ、戦争について発信し、世界が幸せになれるように私もその一員として考えて行きたいため応募しました。

私の平和宣言

人への思いやりの気持ちを忘れずにいたい。

派遣報告

戦争を知る日本に生まれた私達が考えるべきこと

私が広島派遣プログラムに参加した理由は「平和」に対して、広島の人々はどのような気持ちでこれまでを生きてこられたのかを知りたかったからです。

今回様々な体験をし、広島に住む方々の「平和」への強い想いや意志を感じましたが、なかでも被爆者の梶矢文昭さんの講話が一番印象に残っています。

梶矢さんは大切なお姉さんを亡くされ、目の前で人が次々と倒れていく姿を見て「二度と核兵器を使うことを許してはならない」「たくさんの広島市民が亡くなった。耐え難い悲しい出来事だ」と話されていました。言葉では容易に表すことが出来ない程の人々の怒り悲しみが込められているような、とてもとても重みのある講話でした。

どんな理由があろうとも、決して戦争をしてはいけないと強く思いました。世界中の人々が日本の戦争の歴史とその残酷さを知ること、平和とは何か、そして自分には何が出来るのかを考えるべきだと思います。

私には今「当たり前前の日常」があります。この当たり前前が壊れないよう、私は相手のことを思いやる気持ちを忘れずに生きて行こうと思います。

応募理由

僕は今まで学校などで被害者の体験談を聞いてきましたが、実際にはどれくらいの方が亡くなってしまったのか、核によってその後困った事はどのような事があったかなどを知りたいです。今回の企画で現地に行き、話を聞いたり、様々な物を見る事で、核爆弾の投下や人間の尊さに関心や疑問を持ち、きちんと理解したいと思ったからです。また、そこから今あたりまえにある自分の命に感謝の気持ちを持ち、後世に伝えていきたいです。

私の平和宣言

身近な人に戦争や原爆について知ってもらう

派遣報告

広島に足を踏み入れて

私は最初原爆や戦争に興味がなかったのですが、授業で原爆の話を聞いたり、戦争のニュースを見るうちに興味を持ち始め、広島派遣に参加することにしました。広島で色々なものを見ました。どれも心に残る物ばかりでした。特に心に残っているのは資料館で見た外国人観光客でした。多くの人は展示を見て一緒に来た人と意見交換をしていましたが、ただただ真剣に見ている人もいました。その時、彼らも原爆や戦争に関心を持っていることに感心し、今まで戦争や原爆について関心を持たなかった自分を恥ずかしく思いました。本当に感謝しきれないぐらいの沢山の経験をさせてもらいました。

今もなお戦争が続いていて、原爆が世界で1万発以上あるということを考えると、まだ平和とは言えませんが、戦争や原爆のことを多くの人に知ってもらえれば今の状態を少しずつ変えていけるのではないのでしょうか？唯一の被爆国である日本を多くの人に知ってもらうために、まずは身近な方々に少しずつ広めてくことが、私ができる一番の方法だと思っています。

応募理由

理由は、最近ニュースを見て、戦争のことが出てくると、「もし核やミサイルが落ちてきてしまったらどうしよう。」と思うことがあり、核について今知っておきたいと思ったからです。特に、今各地で戦争をしている中で核を持った国があり、その核がいつどこに投下されてもおかしくないからこそ、初めて核が投下された国の国民として、その危険さや恐ろしさについて知りたいと思いました。

私の平和宣言

学んだことを身近な人に伝え、平和への意識を高める

派遣報告

平和への一歩

今回の平和学習広島派遣プログラムで特に印象に残っていることは、3つあります。

まず1つ目は、講話です。事前学習の講演会で講師をされた桐谷さんは「被爆者とは結婚したくない」などの差別を母親が受けたことを語ってくれました。また、被爆体験者の梶矢さんは、原爆投下直後の惨状を語ってくれ、原爆の恐ろしさが分かりました。

2つ目は、原爆資料館です。資料館では原爆に関する絵、写真、焦げてしまった日用品などが展示されていました。目が飛び出して神経も外に出てしまっていた写真を見て、すごく怖かったです。黒焦げになった三輪車を見ると、せん光がすごく強かったのが分かり、逃げられる気がしませんでした。

3つ目は、平和記念式典です。子ども代表の「世界を変える平和への一歩を、今、ふみ出します」という言葉を聞いて、原爆の怖さを知るのが、平和への一歩だと思いました。

このプログラムに参加し、ぼくも、平和への一歩をふみ出せた気がします。

応募理由

ぼくがこのプログラムに応募した理由は、学校においてあった「はだしのゲン」を読んだからです。それで、広島の実爆直後や、その後の情景に恐怖を覚えました。例えば、服が焼けて皮ふにくっついてしまったり、ウジが湧いてしまったりなどです。ですが、住民が力を合わせて町を復興させていました。もう原爆を二度と使ってはならないと思ったので、深く知りたいです。

私の平和宣言

平和の尊さを未来へ伝える

派遣報告

平和を未来につなげるには

私が平和学習に参加したいと思った理由は実際にこの目で、戦争や原爆について学びたかったからです。私は、原爆の被害にあった原爆ドームを見て、「元は大きくて立派な建物だったのに鉄骨がむき出しになってしまったなんて…」と思い、原爆が恐かったです。平和資料館を見学すると、原爆の熱線によって溶けたガラス片、爆風によって壁に突き刺さった窓ガラスなど当時のことが伝わる展示物があり、改めて原爆の恐さを実感しました。被爆者の梶矢さんのお話を聞いた時、印象的だったのは、空襲警報がならず原爆が落ちたことです。そして原爆が落とされた後、梶矢さんは必死になってがれきから抜け出し外に出たら、やけどした人がぞろぞろと並んでいたそうです。もしも私がそのような経験をしてしまったらと考えると怖くて恐ろしいです。梶矢さんは世界にはまだ戦争があり、その戦争で悲しむ人がいなくなるには、「みんながみんなを大切にすること」をすべての人が意識することだとおっしゃっていました。そのために今の私ができることは今回の貴重な体験を活かして、身近な人に平和の輪を広げることだと思います。

応募理由

教科書で原爆についての物語を読んだり、テレビで戦争の恐ろしさを知り、たくさんの方が命を落とし、今も苦しんでいる事を知りました。また、被害がどれほど深刻で、健康被害がどんなものか、戦争によって当たり前だった日常がどの様にかわってしまったか疑問を持ったからです。その上でこれから戦争のない世界をつくる為に、平和の大切さを伝えていきたいと思い、参加したいと強く思いました。

C 班（広島）



ユースリーダー	栗本	七碧
班長	石井	うらら
	引野	夏輝
	相馬	花音
	大庭	悠真
	矢澤	弘基
	曾我	怜

“最後の世代”をどう生きるかを考え続ける

現地に赴いたからこそ伝えたいこと

第二次世界大戦終戦から79年の時が経った。「79年前」この数字、あなたは
どう思われるだろうか。大昔？つい最近？

今回、広島派遣に参加したことで私は時間の残酷さを身に染みて感じた。先述し
た79年は今日までの長い歴史の中で考えるととても短い期間だが、人間の生涯と
比べれば大半を占めるととても長い期間である。つまり、何を意味するか。被爆体験
を語れる人が刻一刻と少なくなっているということである。亡くなっている、とい
うことも事実だが、お年を召されてもう語れる状態ではなくなっていたり、被爆当
時とても幼かったために記憶がおぼろげだったりする方もいらっしゃる。このよう
な要因から私たちは“被爆体験を直接聞ける最後の世代”とも呼ばれている。

では、“被爆体験を直接聞ける最後の世代”である私たちの使命とは何か。私は、
被爆体験を風化させず被爆者の想いととも未来へ語り継ぐことではないかと思
う。この使命を果たす為には、この報告書をお読みになったあなたの協力も必要だ。

太平洋戦争時、日本を襲った恐怖について学び、それを未来に繋いでいくべきだ
と思うからです。核兵器は、この世界に大きな恐怖をもたらします。しかし、実際
にその恐ろしさを体験し今日に語れる人は年々減少しています。だから、一人でも
多く新たな語り手を増やすべきだと考え、まずは私自身がなろうと思いました。悲
惨な出来事にも目を背けず、未来の世界がまた同じ過ちを犯さないために自分にで
きることをしたいです。

私の平和宣言

今ある日常に感謝し、平和に対する想いを繋げていく

派遣報告

私に出来ることから

広島を訪れ、過去の悲劇を直視することは、決して容易なことではありませんでしたが、その中で私が感じたことは、未来に向けた希望と責任です。広島の平和記念資料館で展示されている数々の資料や証言は、私に深い衝撃を与えました。突然、後ろから声をかけられ振り向くと、年配の男性が「この写真の人は私のお父さんなんだよ」と教えてくれました。その方はお父さんの背中に刺さった無数のガラスを慎重に抜いていたと。当時の惨劇は展示された記録としてだけでなく、今を生きる人の記憶の中にも残っているのだと感じました。戦争・原爆の悲惨さを実体験として語れる人が一層少なくなっていく中で、この研修で学んだことを出来るだけ多くの人に伝える、それは藤沢に帰ってきた私達に託された使命だと思います。その第一歩として、私は文化祭のプレゼン企画で、今回の経験を踏まえた平和に対する想いを英語で訴えかけました。終了後、何人かの方に声をかけていただき、この夏の経験を私なりに精一杯お話しすることができました。私達がこの歴史を学ぶことは、単に過去を知るためだけではありません。その先の未来を見据えたとき、私達には今ある平和を守る責任があります。過去の過ちを繰り返さないため、ここ藤沢でも、未来の平和へと繋がる行動を一人ひとりが心がけていくことが大切だと改めて感じました。

応募理由

小学生で長崎を訪れ、初めて原爆がどのようなものなのか学んだ際、私が感じたのは原爆の悲惨さだけでなく、この事実を知らない若者が日本に大勢いることに対する驚きです。私もその一人でしたが、これをきっかけに周りの友人に学んだことを伝えるようになりました。ただ、被爆地は長崎だけではなく。広島にも落とされたという事実と、広島でしか学べない歴史と現状を、藤沢に帰っても周りに伝え続けたいと思っています。

私の平和宣言

悲劇を忘れることがないように語り継ぐ

派遣報告

■ 記念公園の下には何がある

「平和記念公園の下にはたくさんの遺骨が埋まっている。私はごめんなさい、ごめんなさい。と言いながらあの公園を歩いている。」

これは被爆者三世である、事前学習講演者の桐谷多恵子さんが紹介した被爆者の言葉です。私はプログラムを通してこの言葉に一番衝撃を受けました。なぜなら、被爆者の方々は全員あの公園が作られたことに感謝していると思い込んでいたからです。実際に公園の上を歩いた時、この下にたくさんの遺骨があると思うと涙が出ました。無意識に「ごめんなさい。」と呟いてしまうほどショックで、その後資料館に展示されている絵や写真を見ると心がさらに痛くなりました。この経験は桐谷さんの講演を聞いた参加者しかできない体験です。これを私は「貴重な体験」にしてはいけなかったと思います。核兵器を無くすためには「貴重」から「知っていて当たり前」にしなくてはならない。そう確信しました。広島、長崎の悲劇は知っていて当たり前なのです。知っていて当たり前のことを知らない人たちにどのようにして知ってもらおうか。それが新しくできた私の人生の課題です。

応募理由

私の参加希望理由は、実際に起きた原爆の事をもっと知ってたくさんの人に伝えたいと思ったからです。私は授業で驚いたことがあります。広島、長崎が被爆した日、終戦日を知らない同級生がたくさんいた事です。ショックでとても悔しくなりました。伝えていく人が少ないから戦争に無知な人が多いのです。歴史を絶対に繰り返さないために、私はこのプログラムに絶対に参加して周りの人たち、そして後世に原爆のことを伝えたいです。

私の平和宣言

平和の輪を広げていきたい

派遣報告

平和について

私は平和な国に生まれ育ちました。大勢の外国人が江の島観光を楽しんでいます。一方で海外では今でも戦争が行われ苦しんでいる人々がいます。私は平和学習広島派遣プログラムに参加し、平和について深く考えようと思いました。このプログラムを通して、一番印象に残ったことは、被爆体験証言者である梶矢文昭さんのお話です。「原爆が落ちた時、必死になって逃げた。とにかく必死で怖いという感情もなくなった」梶矢さんの必死に伝えようとしている姿に、地獄のような風景が頭に浮かび怖くなりました。戦争や核兵器の恐ろしさを改めて知り、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないと心に誓いました。

現在、私は将来の夢があるし、今後やってみたいこともたくさんあります。平和とは未来があることだと思い、今を生きていることに感謝をし続けたいと思いました。

今回経験したことや感じたことを多くの人に知ってもらい、平和の輪を広げていきたいと思います。

応募理由

毎年8月になると広島・長崎の被爆地のニュースを見て、九州出身の母は悲しい気持ちになると言います。小学生の頃から8月6日は登校し、戦争の悲惨さを学んだと聞かされます。海外では戦争が行われ苦しんでいる人がいます。一方で、大勢の外国人が江の島観光を楽しんでいます。

私は平和です。平和が何かさえピンときません。この平和がどのような過去の上に成り立っているのか、いま学びたいと思い、申込みました。

二度と戦争は起こさない

広島派遣で感じたこと

僕が平和学習広島派遣プログラムに参加したきっかけは、平和のことや戦争のことを知るためです。心に残ったことは二つあります。

一つ目は、平和記念資料館です。破れた服、黒焦げになった弁当箱、黒い三輪車などいろいろな物があり、思わず目を背けたくなりました。原爆の被害の大きさや恐ろしさが伝わってきました。広島市の人々の命が一瞬で奪われたことに、信じられないほどの恐怖を感じました。

二つ目は、被爆電車で聞くことができた旧日本銀行広島支店のことです。原爆の強烈な爆風によって、外形は残ったものの内部は破壊されて、42 人の犠牲者ができました。何気ない日常が、一瞬で崩壊されてしまったのです。誰も予想していなかったと思います。

僕は、今回の派遣プログラムに参加して、戦争は絶対にしてはいけない、核兵器はあってはいけないものだと思います。戦後 79 年が経ち、被爆者や戦争を経験した人が減っている中、僕が今回体験させていただき知ることができたことや感じたことをたくさんの人に伝えていきたいと思います。

ロシアとウクライナの戦争のことをテレビのニュースで見ても、もし日本で戦争が起きた時に、自分の今の生活がどのようなになってしまうのか不安になってしまった。日本でも昔、戦争していたと聞いて、その時のことをもっと詳しく知りたいと思った。今回、実際に原爆が落ちた広島に行って、どんなことが起きたのか、そこにいた人がどう感じたのかを知ることによって、平和の大切さを学べると思い、希望した。

私の平和宣言

平和について学び、伝え続け未来へつなぐ

派遣報告

～平和～伝え続ける

本当に想像できていますか。原爆投下により、多くの命が一瞬にして奪われたことを。

この報告書では平和学習広島派遣プログラムを通して実際に見た事、聞いた事をもとに印象に残った事や感じた事の一端を報告します。派遣 1 日目は平和とはおたがいを大事にし合うことと語る被爆者、梶矢文昭さんによる被爆体験講話がありました。そこでは原爆が落ちる時、空襲・警戒警報は鳴っていない事や、にげる途中に見た「水をくれ！」とさけぶ人々は 79 年たった今でも忘れられない事、広島原爆が核分裂を起こしたのは 1 % と言う事などを話してくれました。僕は 1 % と聞いてぞっとしました。また、梶矢さんの話しているようすを見て原爆の被害は目で見える所だけでなく心や気持ちもきずつけるのだと感じました。派遣 2 日目、3 日目は被爆した物などが触れる本川小学校や被爆電車に乗車しました。僕にとって実際に広島に行き、実際に行かないとわからない事を学んだ 3 日間はとても有意義なものになりました。僕は平和について学び、伝え続け未来へつなぎます。

応募理由

私は、平和とはなにか考えている。きっかけは平和が大切なのは分かっているが平和とはなにか問われた時に分からなかった事だ。その後、戦争、被爆する前、した時、直後を知り、今との違いを見つけ、深く考えると自分なりに平和とはなにかが分かるのではないかと考えた。百聞は一見にしかず。実際に見た方がピンとくると思い、平和学習に応募した。私は平和学習で広島に行き、友達が納得できるように説明したい。平和の大切さを。

私の平和宣言

声をかける、平和の一步の後押しに

派遣報告

戦争が生むもの

それは破壊と恐怖。

それ以外に、戦争が生むものなんて存在しない。戦争は、町を壊し、人々の体を壊し、心さえもこなごなにくだく。人々に残されるのは、深く傷ついた心身と焼け野原。私は、はじめての平和学習で、人の恐ろしさを知った。原爆を落とした飛行機の名前は、エノラ・ゲイ。この飛行機の、機長の母親の名前だ。そう教えてもらった時すごく驚いた。信じられなかった。核兵器は恐ろしいけれど、それを作ったのは「人」だ。本当に恐ろしいのは、原爆じゃなくて「人」なんだ。すごく怖かった。

だけど、私は、違う。「私」が人を殺したわけじゃない。戦争は、なくさなきゃいけない。

でも「今」日本では戦争はない。戦争は私に深く関係している事じゃない。そう思う人もいると思う。

でも、その考えのせいで、もう一度原爆が使われるかもしれない。そんなのはいやだから、たとえそれが大きな助けにならなくても、1秒でも早く、「世界中の平和」に手がとどくよう、「今」「私」にできることをする。

応募理由

私は教科書の「たずねびと」という話がきっかけで、このプログラムに興味を持ちました。そこに、広島に世界で初めて原子爆弾が落とされ、十四万人もの人が犠牲になったとあり、とても恐ろしい事だと思いました。

私は死にたくない、たった一つの爆弾が落されたその瞬間、子どもや赤ちゃんの未来まですべて壊れてしまった。こんなにも悲しい事はもう二度とおきてほしくないから、戦争と原爆について学びたいと思い応募しました。

D 班（長崎）



ユースリーダー	木目田	悠喜
班長	長谷川	真心
	中村	悠真
	吉田	美沙希
	茂木	玲衣
	林	航平
	相川	純大

私の平和宣言

世界中の人が互いを知り、幸せに生きることのできる世界を目指す。

派遣報告

主体的に動く大切さ

この研修を通して、平和を実現するためについての自分の考えを持つことと話し合うことの大切さを学んだ。

自分の意志で情報を手に入れることや実物を見に行き、話を聞きに行ったことで、今までの自分が平和について考えることに対して、他人事であることに気づくことができた。いままでどこか他人任せであった平和についての考えを、自分事に変えることができることを学んだ。

さらにその上、他の人と話し合うことで、自分事として考えても、まだ足りない視点があることに気づく。いくら能動的であろうとしても自分一人では視野や視点が足りない。自分の考えが及ばなかった部分や自分にはなかった面からの考えを他の人との話し合いを通じて得ることができることを学んだ。

研修で学んだことを、この研修で終わりではなく、今後の自分に生かしていこうと思う。主体的に行動することで、自分の考えの更新と話し合う機会を得ていこうと思う。

応募理由

私は将来、研究職に就きたいと考えている。科学の力は人々の生活を豊かにする一方で、悲惨な結果をもたらすこともある。広島、長崎に落とされた原子爆弾もその一例だ。科学者には再びそのようなことを起こさないようにする責任があると私は考えている。その責任を全うする為に、原子爆弾という科学の力が招いた惨事について考え、適切な科学の探求を行うために必要な教養を身に着けるためこのプログラムを希望する。

私の平和宣言

そばにいる人を大切にする、それを世界へ広めていく

派遣報告

長崎の平和を世界へ

今、日本で広島と長崎に原子爆弾が落ちたことを知らない人はいないでしょう。しかし、その原子爆弾がどれほどの被害をもたらしたのか、みなさんは知っていますか？私は平和学習長崎派遣プログラムで得られた体験、学びから改めて平和の大切さを訴えたいです。私は長崎に滞在した3泊4日間で多くの原爆の被害にあった物や人々を見てきました。世界には核兵器が約12,520発あり、その一つ一つが広島と長崎に落とされた原爆の数十倍から数百倍の威力があります。もし、核兵器が使われたらどれほどの被害が出るのか、想像できるはずです。

8月9日に行われた平和祈念式典で長崎市長が「長崎を世界最後の被爆地にする」と発言されました。この言葉を目標に長崎では平和の大切さや原爆の恐ろしさを伝えるさまざまな活動が行われています。実際に長崎の学生たちが行っているピースボランティアの方々と共に活動する中で長崎の人々の平和への思い、そして願いを強く感じました。これらの活動が報われ、核兵器のない世界が作られることを強く願い、思いを伝承していきたいと思います。

応募理由

私がこのプログラムへの参加を希望する理由は、プログラムを通して学び得たことを、たくさんの方々に、そして未来の子どもたちに伝えたいからだ。私の将来の夢である小学校教員には、平和学習を通して平和を大切にすることができる人を育てる役割がある。小中学生たちと共に平和の大切さや平和について学ぶ難しさに向き合いながら平和学習の在り方を考え、この経験から自分の言葉で平和に対する思いを伝えられるようになりたい。

互いに理解する！そして楽しく！

平和を未来へ

私は、地球上の紛争が増えている中で、戦争体験者や被爆者が減っていく現状を知り、私が平和を維持していかなければいけないと思った。そこで、戦争とは何か、平和とは何かということを学び直すために、平和学習長崎派遣プログラムに参加した。

私は、被爆をした平和案内人の方の話や被爆者の講話を聞いた。そこで、戦争や原爆は、街を破壊したり、人を傷つけたり、死に至らせたりする点で恐ろしいと思った。何よりも心がやられてしまい、本来の人間らしさを保てなくなることを初めて知り、さらに恐ろしいと思った。では、どうしたら戦争はなくせるのだろうか。青少年ピースフォーラムで戦争疑似体験や同世代との戦争に関する意見交換を行った。そこで私は、1人ひとりが平和を求める意志を示すことで戦争はなくせると思った。また、私達をはじめとする戦争を体験したことがない世代は、今の平和はとても尊いものであると強く意識する必要もあると思った。

私はこの平和学習を通じ、戦争は些細なことで勃発するため、友人同士で起こるような些細な問題のように、お互いを理解し合えば解決できるのではないかと思った。私はそうしたいと思う。また、平和の尊さを認識し、平和を守る意識を1人ひとりが持つことも重要であると思った。

私は社会科の授業で原爆について学び、原爆は自身が思っていた以上に人々を傷つけたことを知り、心が痛み、平和のありがたみを痛感しました。

しかし、近年世界では戦争が少なからずあります。また、原爆を伝える人が減っていることも知りました。

そこで、今回の平和学習を通じて、実際に現地に行き原爆に関する理解を深め、自分より若い人々や世界に平和の大切さ伝えていけるようになりたいと思い、参加を希望します。

被爆者の思いを未来へ伝える

長崎が残す原爆の跡

本プログラムに参加する前は、長崎に原爆が落とされたことは知っていたが、長崎に落とされた原爆の種類など専門的なことは全く知らなかった。そのため、この長崎派遣に参加して得られたものが大きかったと感じている。

長崎には多くの原爆に関する資料が残されている。城山小学校平和祈念館では、亡くなった方の年齢に注目した資料が保管されていた。そこでは、10代後半から20代の女性たちが多く亡くなっていたことを知った。この資料では他にも考察できることがたくさんあった。また、原爆資料館では原爆投下の時間で止まった時計やファットマンの模型などを見た。これらの資料から写真で見るとは違う迫力を感じた。

事前学習では長崎の被爆について学んだが実際に長崎に行ったことでさらに学びを深められた。また、長崎で被爆された方のお話を伺って被爆者の方々の核兵器廃絶に対する強い思いを感じた。私は長崎派遣を通して平和と核兵器廃絶の必要性を知り、実現したいと思う。

被爆した方の話や、他国の原爆への解釈など多方面から、原爆を知り、広めたいから。日本の統治下にあったアジアの国では、「原爆が戦争を終わらせ、多くの命を救った」と考えられているが、原爆によって、多くの人が亡くなってしまったので、原爆以外に、降伏させる方法があったのではないかと思った。私は、協議など武力以外の降伏要求が正しいと思った。この問いについて意見を共有してみたいから。

悲劇を忘れることがないように語り継ぐ

原爆の真実 in 長崎

今回私は、原爆の怖さを知るために平和学習長崎派遣プログラムに参加させてもらいました。私は長崎に3泊4日の勉強に行き、強く感じたことが3つありました。それは、原爆の悲惨さと威力、そして落ちた後の過酷さでした。1日目は計画に参加していたみんなと一緒に、城山小学校というところへ行きました。そこは、高台にある小学校で、そこには原爆で被爆した当時のままの建物の一角や、被爆クスノキ、そして被爆直後の町の模型などがありました。原爆は、地上から約500メートル地点で爆発しました。原爆には爆風、熱線、放射線が入っています。そのため高台にあった城山小学校はその被害を直接受けてしまったのです。そのため城山小学校ではほとんどの方々が亡くなってしまったことを知り、今まで感じたことがないような悲しい思いをしました。2日目に私たちは、原爆資料館に行かせてもらいました。そこでは原子爆弾の詳しい説明文や模型、(アメリカ軍が撮影した)原爆が落ちて爆発したときの録画映像などもありました。また、被爆当時の写真などもあり、治療を受けている写真が展示されていました。とてもリアルで怖いと思い、あらためて原爆の威力と過酷さを知りました。そして2日目の最後にはピースフォーラム交流会に参加しました。そこで別の地域から同じように原爆を知るために来た人達と一緒にご飯を食べて交流しました。3日目は、8月9日でした。79年前のこの日は長崎に原爆が投下されて日です。当日は平和祈念式典が行われ、今回企画に参加した半数以上の人に参加しました。そこでは原爆で亡くなった人を弔うために、平和祈念像の前で行われました。長崎市長達のお言葉を聞き、最後は平和をモチーフにした歌を歌ってもらい、式典は終わりました。今の私たちの平和は、過去の人たちの苦しみや悲しみの上に成り立っていると思いました。最終日の4日目は、ちょっとした自由時間がありました。そこでは家族へのお土産などを買ったりして楽しかったのですが、私はこのような平和をもう二度と原爆の恐怖に奪われてはならないと強く思いました。これからは一人一人が原爆の事を語り合い、もうこのようなことで悲しむ人をなくするために日々努力していきたいと思いました。

私は原爆被害で亡くなった人達の事を決して忘れないため、長崎に行きたいです。世界で唯一の被爆国の日本、その被害地の長崎、広島で多くの方が被害に遭いました。同じ日本人としてとむらいたいと考え、原爆の被害にあった方々を思い知り考えたいと私は思いました。

戦争がふたたび起きない平和な世界を

平和の大切さを知った長崎

僕が平和学習長崎派遣プログラムに参加しようと思ったきっかけは、長崎の原子爆弾についてよく知らず、原爆について勉強したいという思いがあったからだった。

3泊4日の中で印象に残った一つは、原爆資料館の一枚の写真だった。亡くなったお母さんの前で手をあわせる少女の写真を見て、その少女の気持ちを想像するだけでとても悲しい気持ちになった。また、ガラスに手の骨が残る展示物からは、原爆のおそろしさや怖さが伝わってきた。たくさんの写真や資料からは、こわれた街の様子や、やけどで苦しむ人々の姿が伝わってきて、今でも原爆症で苦しむたくさんの方がいることを知った。

3泊4日という短い期間だったけれど、こんなに戦争や平和について深く考えたのは初めてだった。自分の国だけを考えないで相手の国のことも大切にする。戦争がおきない平和な世界になってほしいと強く思う。

ちいちゃんのかげおくりや、一つの花を勉強してきて、日本が悲しい戦争の過去があることを知りました。だから、長崎に残る戦争の歴史あとを見学して、戦争をしていた昔の日本の事を勉強してみたいと思いました。昔、お父さんが長崎に藤沢の子ども達を連れて行ったときに見た、戦争や平和について話し合うピースフォーラムについて話をしてくれたことも興味を持つきっかけになりました。参加してたくさんの方々と話をしてみたいです。

争わず平和を未来まで続ける

戦争をしないと誓った自分

僕は藤沢市役所で参加者と合流し、そこから僕の平和学習長崎派遣プログラムが始まった。長崎では、まず市内の城山小学校に行った。ここでは、爆心地の上空五百メートルで起きた爆風によって何もかもが吹っ飛んで、多くの尊い命が奪われた。そのことを僕は、平和案内人の方の話や平和祈念館の資料で知り、小学校で亡くなった人は若い女性が多かったことに衝撃を受けた。それは、未来がある若い人達までもが、戦争に巻き込まれていることを知ったからだ。

原爆資料館のホールでは、96歳の被爆者の方から、爆風で建物が倒壊し目の前で妹さんが瓦礫に挟まれたり、お母様が誰だかわからないぐらい血だらけになって帰ってきた話をうかがった。こんなにも身近な人が犠牲になったことに、驚いた。

8月9日、長崎に原爆が投下された日。岸田首相や藤沢市長が参加した平和祈念式典に参列。長崎市長の平和宣言を聞き、僕が二度と戦争をしては行けないと誓った平和学習長崎派遣プログラムが終わった。

僕がこのプログラムに参加を希望する理由は、青少年ピースフォーラムの時に自分の意見を言って、そして僕の言った事に対しての大人の人や全国から来た友達のアドバイスを聞いて、考えをまとめたり交流を深めたりしたいからです。また、平和案内人の方から1人で来ても分からない詳しい情報を教えてもらい、他の友達と共感したり他の友達の考えを聞いたりしたいと思ったからです。

E 班（長崎）



ユースリーダー	中川	ひまわり
班長	天野	聡介
	佐藤	千佳
	玉木	翔
	佐々木	萌衣
	小林	京慎
	井上	成

私の平和宣言

平和を知り考え伝えられる存在へ

派遣報告

未来の平和のために

私は以前この派遣学習に 2 度参加させていただきました。そして今回はユースリーダーとして 3 回目の長崎の地を訪れさせていただきました。

原爆遺構地を、実際に被爆した人々の証言や、戦争によって失われた多くの命の重みを小中学生であった当時より深く実感しました。平和祈念式典に参列させていただき、原爆死没者名簿が奉納される所を目の当たりにし、年々少なくなっている被爆者の方々の苦しみを次世代に伝える責任を強く感じました。

また、ピースフォーラムで同世代の学生と意見交換をし、今の若者たちに求められることは、歴史を学び、過去の教訓を未来に生かす姿勢であると感じました。自らの言葉で発信し、行動することが求められるといえます。

今までの長崎派遣や平和学習の経験を活かしてこれから生きる若者としてこの思いを受け継ぎ、自分なりに未来の平和を築くために積極的に関わっていく活動をしていきたいです。

応募理由

私がこのプログラムへの参加を希望した理由はこのユースリーダーの募集を目にした時、今までの参加経験を活かして子供たちの学びの手助けをしていきたいと考えたからです。私自身、長崎派遣プロジェクトに今まで 2 度参加した経験があります。小学 4 年生、中学 1 年生の頃の 2 回の派遣でそれぞれ違う視点から平和学習に参加する貴重な体験が出来ました。今回の派遣事業に参加して、今の自分だからこそ出来る学びや経験をしたいです。

私の平和宣言

平和は思いやる事で生まれる

派遣報告

長崎の光と影

私は、平和学習長崎派遣プログラムに参加しました。やはり長崎の街並みはとてもキレイで、特に稲佐山から見る夜景や教会など多くのきれいな建物があり感動しました。しかしこのキレイな街並みの裏には悲惨な過去がありました。それは原爆投下によって多くの人々が亡くなりました。キレイな街並みも更地となってしまう、今の長崎の街並みからは感じる事が出来ないほど悲惨な状態でした。そこから復興してゆき、今のキレイな街並みに戻って行きました。しかし近年戦争体験者の多くの方々が亡くなり少なくなってしまい戦争を知る人が少なくなっていました。長崎のキレイな街並みなど光の部分しか見られておらず、影の部分になってきている戦争の事や原爆の事が忘れ去られてしまうので、この活動を通して、長崎の影の部分である悲劇をこれからの世代に語り継いでいきたいと思います。

応募理由

この長崎派遣プログラムに参加を希望する理由は、青少年ピースフォーラムに出席したいからです。全国からやってくる同世代の仲間たちと戦争の悲惨さ、無意味さについて語りあい、自分の考えを深め、平和の大切さについて、そして今なお世界のあちこちで続いている戦争が終わるよう、藤沢から発信したいです。

私の平和宣言

平和について考えることの大切さを周りの人に伝えていく

派遣報告

今見ている景色が全てじゃない

私は今回の長崎派遣を通して、原爆の恐ろしさを改めて学ぶことができたと同時に今の日々がどれほど幸せなのかを改めて実感することができた。

長崎では原爆資料館や城山小学校で見た被爆当時の写真や跡を見た時、衝撃を強く感じた。原爆が恐ろしいものだとなんか分かっていてもどれだけの威力なのかは知らず、皮膚が溶け内臓まで焼けると聞いたときは被爆した時の痛みや苦しみなど考えるまでもなくとても恐ろしいものだとなんか分かった。もし原爆犠牲者の方が生きていたらどのような未来が待っていたのか。どれだけの笑顔がそこにあったのだろうか。そんなことばかり考えてしまう。現在の長崎の街並みは壮絶な過去とともにあって決してそのことを忘れてはいけないと感じた。

戦争を経験していない私達には被爆時の痛みや苦しみが分からない。そんな私たちに出来ることは後世に伝えていくことだと思う。今見ている景色が全てではないということを忘れずに日々生きていきたいと思う。

応募理由

学校でこのプログラムを知り、参加したいと思い、応募させていただきました。私は学校での学びでは、あまり原爆に触れてこなかったため今回参加して自分自身の考えの幅を広げ、未来に活かせる学びを深めたいと思ったからです。また、他校の生徒と一緒に平和について話し合うことにとても興味がありやってみたいと思いました。現地に行って自分自身の身体で体験し、考え、今の世の中に何が必要なのかを考えたいです。

長崎で感じたこと、自分に出来ること

私は長崎派遣プログラムに参加しました。私が今回の派遣プログラムで印象に残った場所は、原爆資料館です。私はその中でも、人の死体が写っている写真を見て、驚きました。なぜかという、私は人生で初めて人の死体を見たからです。

具体的にはその写真には、被爆した方々が水を求めて倒れていく姿が写っているものでした。その写真に写っている人の死体はほとんど焼け焦げていて、顔もわかりませんでした。私は人の死体を一度も見たことがありませんが、この状態は明らかに異常であると、直感的にわかりました。

今回の派遣を通して、私は「平和」とは何なのか、核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さ、命の尊さなど、多くの現実を知ることができました。戦争はあってはいけません。みんなで力を合わせて、戦争が起こらないようにしなければなりません。

このようなことから、私は一人の力は微力で、出来ることは限られていますが、その限られている力でやり尽くすことを目標に、達成できるように、頑張っていきたいと思いました。

今、世界は再び大きな戦争が起きています。また、その戦争で『核を使用する』と威嚇している国もあります。核の使用は、人命や環境汚染など大きな被害をもたらします。私はその核による被害を受けた世界で唯一の被爆国である日本、被爆地である長崎に行き、戦争の悲惨さを、核兵器の恐ろしさを自分の目で見て感じ、学びたいと思い、参加を希望しました。

人間の残酷さ

私は、このプログラムに参加し、沢山の新しい感情を知りました。その中でも強く感じたのは、「人間はなんて残酷なのだろう。」と、自分と同じ人間に恐怖を感じました。原爆資料館に行き、被爆した方の資料を見るたびに、お話す姿が目につくか、胸が締め付けられるような気持ちになりました。

私がこのプログラムに参加したのは、原爆の記憶が世界から消えてなくならないように伝えていきたいからです。ですが、私はこのプログラムに参加する前、その目標を少し甘く見ていたのかもしれません。原爆の事を知っていたつもりでした。でも本当は、知っているよりも残酷で、恐ろしくて、言葉にできないような恐怖が襲ってきました。それと同時に、その言葉にできないような恐怖をうまく言葉にして、辛い過去を話してくれた人の思いを無駄にしないと決めました。

世界には原爆がまだ一万個以上あります。この悲劇を二度と繰り返したくありません。その為に、身近な人から世界中に、長崎で起こった悲劇を必ず伝えていきます。

長崎に行き、自分の世界を広げたいです。学校で平和主義の学習をして、もっと知りたいと思ったので、平和に関わるたくさん本を読み一人一人に壮絶な物語があることを知りました。その中で一番印象に残っている本は「かずさんの手」です。この本で長崎の原爆を知りました。そして、長崎平和学習があることを知り、プログラムに参加し、原爆の悲劇を学び、まわりに平和のバトンを繋げていきたいと思い、参加を希望しました。

私の平和宣言

平和の文化を広げ続ける

派遣報告

想いの数だけ 平和がある

「平和をつくる人々よ！一人ひとりでは微力であっても無力ではありません。」

これは、平和祈念式典での長崎市長のお言葉だ。私は式典に参列させていただきこのメッセージを生で聞いたとき、心に衝撃を受けた。このお言葉から、微力な人間が集まってあの悲惨な原爆を作ったのであれば、平和を願う人々が集まれば大きな力となり、原爆などの核兵器を廃棄し、戦争をなくせるはずだと思った。式典を通して、私の想う平和とは、自分だけが幸せな日々を過ごすことではなく、世界中の人々が戦争のない何気ない日常を送れることだと実感した。

そして、派遣プログラムに参加させていただいた私たちの役目は、まだ始まったばかりだ。実際に被爆による惨状を目で見て、手で触れ、被爆者の方と対面したことで、『原爆の恐ろしさ』と『平和の尊さ』について深く学んだ。私たちはこれから、この学びを世界へ発信し続けることが大切だ。私の場合は、まず、クラスみんなに今回の学びをプレゼンテーションし、「自分の大切な人たちにとっての平和とは何かを考えてほしい」と伝えた。

一人ひとりが「平和とは何か」を考え、祈ることで、平和の文化が広がると思う。人の想いの数だけ平和があり、その想いを伝え続けることで、平和の文化が作り上げられるのではないだろうか。

応募理由

私は、毎年夏休みに、一学期の社会科見学を振り返り「藤沢市民として何ができるか」を考えてきました。三年生の時は『ぼくが藤沢市のためにできること』、四年生の時は『湘南の海を守るために』、という意見文としてわかふじに掲載していただきました。五年生になった今、視野を広げ、日本の過去と現在について深く学び、その中で大切だと感じたことを、藤沢市の未来のために自分の言葉で伝えたい、と思うからです。

取り合いをせず、けんかをしない！

長崎の被爆体験講話を聞いて

被爆当時 11 歳だった松尾幸子さんのお話を伺いました。松尾さんは、「白色の光が光った。鉄でもぐにやりと曲がるほどの熱線だった。原爆は爆風や熱線などで人々を苦しめていた。骨がいっぱいころがっていた。板の上で寝ていることしかできない人もいた。がんで亡くなった人もいた。」など、教えてくれました。それを聞いた僕は、とても原爆が恐ろしくなりました。だからこそ、「平和」について考え行動しなくてはと思いました。

ピースフォーラムでは、平和への取り組み目標を考え、「けんかをしない。」と色紙に書きました。平和学習から帰ってきて、僕なりに考えたことや感じたことがたくさんありました。キャンプ場の山道を歩いていた時、とても大きな木が斜めに傾いていたり、横倒しになっていたりしていました。それを見た瞬間、「長崎で見てきた爆風で倒れた木みたいな木だよ。」と、お母さんに教えてあげました。こんなに大きな木がたくさん倒れるほどの原子爆弾の爆風の威力は本当に怖いことだと、改めて感じることができました。

僕は、2 年生の頃から 5 年生になることがとても待ち遠しく、楽しみでした。なぜかというと、姉と兄がそれぞれ平和学習で学んできた話を今まで聞いてきたからこそ 5 年生になったら絶対に行きたいと思い、この平和学習に応募しました。長崎に行った姉は、実際に見てきた黄色の爆弾の話、広島に行った兄は、焼け焦げた弁当箱の話をしてくれました。話を聞いて感じていた疑問を、長崎に行って実際に見て、僕も学びたいと思います。

F 班（長崎）



ユースリーダー	川口	真依
班長	栗山	直輝
	溝口	悠路
	堤	花歩
	平綿	詠美
	鈴木	慶悟
	藤川	夏帆

私の平和宣言

誰に対しても思いやりの気持ちを持って接する。

派遣報告

自分に出来ることを

私は長崎派遣に参加した。参加して思ったことは、自分に出来ることは些細なことかもしれないが、実行していきたいということだ。被爆者の高齢化により戦争体験者が減少している今、若い世代がどう行動するのかが重要になると感じる。何も行動を起こさなければ被爆者の想いを受け継ぐことが出来ず、再び悲惨な状況になってしまいかねない。現在、語り部や被爆体験伝承者といった人々が伝える活動を行っているが、そうでない人々も出来ることをやっていくべきだと思う。戦争について調べてみる、家族や友人と平和について話してみる、学んだことの情報発信をする、平和を祈る、一人ひとりが出来ることは微力かもしれないが決して無駄ではない。多くの人が戦争や平和に対して目を向け関心を持つことが大切だ。現在ロシアによるウクライナ侵攻が続き、ガザの状況も悪いままだ。世界に目を向けると戦争により苦しむ人が沢山いる。唯一の被爆国として、この国に生まれたからこそ出来ることがあるのではないだろうか。学んできたことを活かし自分に出来ることを行いたい。

応募理由

昨年広島へ派遣していただき、被爆者の思いや原爆ドームを見学し学ぶことが出来た。一方長崎は訪れた経験が無く、ゼミナールでも長崎に焦点を当て、学んだことがない。また以前あった長崎の戦争を学ぶ講義は廃止されてしまった。私は戦争に関心を持っているが、長崎で起きた出来事について知らないことが多いため、学びたい。また、ユースリーダーとして自ら考え、子供たちがしっかりと学習できるようにサポートしたい。

1000 万ドルの夜景

2024 年 8 月 9 日、最後の夜、稲佐山から長崎の街を見下ろした。この 3 日、城山小学校、山王神社、一本鳥居、原爆資料館などいろいろなところに行った。城山小学校には当時小学 5 年生で父母を亡くした男の子がモデルの像が建っていた。また、山王神社にある被爆クスノキには、痛々しく焼けただれたあとが残っていた。語り部の方の話によると、原爆で全てが焼けてまるで地獄のようだったという。そんな彼女自身も、家も友も親もなくし、それなのに人々から差別を受けてきた。どんな思いだったんだろう。戦争はすべてを壊した。しかし、人々は立ち上がり復興を続けてきた。被爆クスノキは今もなお焼けただれた場所を覆い尽くさんばかりに葉を生い茂らせているし、男の子の像には数え切れないほどの折り鶴の輪が手向けられていることを僕は知っている。その思いが 79 年前、焼け野原だったこの街をここまで美しくしたんだと長崎の夜景を見ながら 17 歳の夏、僕は思った。

中学 3 年の秋、原爆ドームが私の目の前に現れた瞬間に戦争が現実になりました。コロナ禍で延期続きの修学旅行がついに始まり、バスの中で盛り上がる中、原爆ドームに到着しました。そこはまるで過去と繋がっているようで、私は歴史書に書いてあるはずの戦争の惨禍を初めて実感しました。そして、千羽鶴を手向け、弔いと平和を祈る中私は平和の尊さを感じました。私はその思いを育み、未来へ繋げていきたいと思い応募しました。

私の平和宣言

伝え続ける あの日からの全ての声を

派遣報告

伝え続ける 8 月 9 日

あの日も蝉は、元気よく鳴いていたのだろうか…。ふとそのようなことを思いながら、僕の長崎派遣プログラムがスタートした。

これまで長崎に関わり、原爆について理解していたこと以上の学びを得ることができたのは、以前よりも物事を多角的に捉えられるようになっての参加だったからだと思う。再び被爆体験談に耳を傾け、悲惨な状況を想像せずにはいられない感情に引き摺り込まれる息苦しさを覚えたこと。また、全国から集まった学生と平和について議論できたことは、大きな収穫であった。この繋がりが、世の中に良い連鎖をもたらす希望の光となることを信じて、微力ではあるが平和実現のために核廃絶を訴え続けていきたい。

僕の長崎派遣プログラムはこれで終わったが、本当の意味での派遣プログラムは正に今、始まったばかりである。

貴重な経験をさせていただいた藤沢市に、心から感謝を申し上げたい。

応募理由

曾祖母は長崎原爆体験者であり、僕が幼い頃から原爆の日のことなど教えてもらったことがある。共に祈りを捧げ、祈りの時を過ごしてきた長崎は、命の尊さや感謝、そして平和を考えさせてくれる場所である。誰もが誰かのきっかけになれるはず。中三となった僕が、このプログラムを通して学び得てであろう過去の悲しさや苦しみ、日常への感謝、そして未来への希望などを発信し続けていくことが使命の一つだと思い応募した。

平和の輪を持つ！

平和に対する思いを愛に変えて

私は長崎派遣プログラムを通して思ったこと、感じたことが本当にたくさんありました。私は派遣プログラムを終えてから自分の中で大きい考えを持つようになりました。それは平和への思いは愛なのではということ。

私は派遣先で色々な人と関わりました。その人達は平和を求める人でした。求めることは素晴らしいことです。ですが私は「じゃあ何で求めることができるのか。」そう思いました。私は愛があるからだと思います。平和を愛しているからこそ平和活動に参加する人がいるのではないか、そう考えてみると愛の存在がどれだけ大切なのかが伝わります。

私は今回の長崎派遣プログラムを通して、今後も自主的に平和に関わっていけたらな、と思います。そして私は平和への思いは愛だと思う、そう周りや身内に伝えていき平和への関心を皆で深めていきたいです。

「ナガサキの命」で初めて原爆を知った日。7万人以上の方々が亡くなられた。それはもう信じられませんでした。そして、その人々はなぜ殺されないといけいないのか。原爆は誰のためにもなりませんし、私は死者が出るのが嫌でした。ですが、これだけ原爆への感性を持っても私が知っている以上に卑劣で残酷なことだと感じます。そこで私は原爆の本当の悲惨さを知り、次世代に語れるような人になりたい。そう思い今回希望しました。

平和とは何か

私が、平和学習長崎派遣プログラムに希望した理由は被爆者の思いを知りたかったからです。私自身がつらいことをまわりに気づいてもらえない苦しさを経験したことがあったことから、長崎に直接行って自分の目で見て、自分のできることを考えようと思いました。

プログラムで一番印象に残っているのは、松尾サチコさんのお話です。サチコさんは当時農家だったので食糧を保管するために、一人で山奥にでかけていました。そこでドーンという音がして被爆をしました。家まで帰るとお母さんや妹はいましたが、お父さんは見つかりませんでした。サチコさんは、この原爆で多くの家族を失いました。80年近くたった今でもサチコさんは心が傷ついています。

サチコさんの話を聞くことで、今の日本では考えられない生活を過ごしてきたのがわかりました。私たちが平和に暮らしているはあたり前ではないこと。だからこそ、私ができることは、長崎や広島に行って次の世代に原爆の恐ろしさを語り継いでいくことだと思いました。

私はこれまでの小学校生活でつらい経験をしたことがある。いやな思いをして周りがわかってくれない時間を過ごしてきた。自分がつらいことをつらいと言えない。そして、わかってくれない苦しさは、心が痛む毎日だった。きっと長崎で、原爆くを経験した人達も家族や友達を亡くして、悲しんでる毎日を過ごしていたのではないか。だから、私は長崎に行き、原爆くを経験した人達の気持ちに寄りそいたい。

長崎に行って学んだこと

僕が長崎の平和学習について知ったきっかけは学校の手紙で配られたからです。家で長崎について知っていることを話そうとしたけれど、そこが何地方にあるのかも原爆のことも歴史のことも何も知りませんでした。知らないことばかりだとわかったから行きたいと思いました。

事前学習で原爆の範囲や被害を学びました。原爆のせいでたくさんの人が死んでしまって悲しいと思いました。

実際に長崎に行くと坂がたくさんあり山のように感じました。坂や階段を上り下りしてとっても疲れてしまいました。原爆の爆風の威力を体感した被爆者の話を聞き学ぶことが出来ました。展望台ではけっこう大きな街が見えその奥には山が見え隣には海が見えました。みんなが頑張って復興したんだなと思いました。

戦争も原爆も存在する意味がないと思いました。なぜなら土地が汚染されてたくさん死者が出るからです。戦争や原爆を根絶して平和な世の中がずっと続くといいと思います。

行きたい理由は、平和を学習したいからです。原爆が落とされた時は、近くの場合ではどんな感じだったのかを知りたいと思いました。自分で行って、話を聞きたいと思いました。戦争の事は全然知らないから、話を聞いて、その場所のものをちゃんと自分で見て、考えたいと思ったからです。感じた事、考えた事を一緒に行った人たちと話し合ってみたいと思いました。

長崎で学んだことを伝えていく

伝わる思い

「長崎県民にとって平和案内人になりたいと思うことは誰にでもあると思う。」

これは城山小学校見学時、私たちの班の平和案内人を務めてくれた方の言葉です。当時 2 才で自身は被爆していませんが、長崎県民としてたくさんの人から原爆について教えてもらい、次は自分がと平和案内人になったそうです。とても素敵な言葉で一番印象に残りました。

私は被爆者やその家族の方々、平和案内人さんの気持ちを実際に聴きたいと思い、長崎派遣に参加しました。

被爆者の方は私たちに勇気を持って話してくれていました。戦争や原爆のことをより多くの人に知ってもらいたいと強く願っているからなんだと思いました。

被爆者の思いをひきつぐ平和案内人の方のお話を聴き、被爆のおそろしさ、悲しさがまっすぐ伝わってきました。私も友達に長崎で学んだことを伝えていけたらと思います。

私は昨年報告会で山田さんの話を聴き、友人が亡くなった悲しさや原爆の恐ろしさを知ることができました。原爆投下から 79 年目の今年、一人でも多くの被爆者の方の話を直接聴いておきたいと思いました。11 時 2 分をどんな気持ちで迎えていたのか、家族や友達を原爆で亡くした人はどのような気持ちをしているのか、戦争に対してどのような気持ちでいるのかなど原爆を体験した人の「気持ち」を知るために長崎へ行きたいです。

広島引率者（平和の輪をひろげる実行委員会 久保 光輝委員）

藤沢の学生たちと8月5日から7日の3日間、広島を訪ねました。伝承者として被爆体験を語り継ぐ保田麻友さん、被爆電車から被爆の実相を伝える加藤一孝さん、街に残る被爆の痕跡を伝える広島市立大学の平和活動サークルS2の皆さんなど、様々な角度から被爆の記憶を伝える方々にお話を伺いました。

その中で印象的だったのは被爆者・梶矢文昭さんの講演後の、質疑応答の時間でした。「平和になる日は来ると思いませんか」「平和とは何だと思いませんか」「核をゼロにしたいが、核があるから平和が保たれているジレンマについてどう思いませんか」と、鋭い質問が、時間がなくなるまで途切れませんでした。話を聞くだけでなく、自発的に質問して知ろうとする姿勢に、参加者の関心の高さを感じました。

質問された方に限らず、広島派遣に参加された方全員が、学校の学びだけに満足せず参加されたのだと思います。今後は、その自発性を一歩進め、広島で学んだことを藤沢で伝えてくれるように願っています。

長崎引率者（平和の輪をひろげる実行委員会 長澤 パティ 明寿委員）

照りつける太陽の下、校庭には野球の練習に励む児童の元気な声が響き渡る。その奥にはひっそりと原爆殉難者之碑が佇んでいた。長崎で最初に訪問した城山小学校。79年前も子どもたちの元気な声が響き渡る学び舎であったこと、その「日常」を一発の原子爆弾がいかに変貌させたのか、平和案内人の方のご説明に熱心に耳を傾ける派遣者の様子があった。

青少年ピースフォーラムを含む4日間、学校・学年・出身地の垣根を越えて「平和」を希求する同世代と語り合い、絆を深め合った経験は今後の歩みの中で必ず活かされるものと確信している。

城山小学校では毎月9日に欠かさず平和祈念式が執り行われ、児童は被爆や戦争に関する講話に耳を傾けるとともに花を持ち寄り校内の被爆関連史跡に手向け続けているそうだ。草の根の継続的な継承活動こそ「平和」の原点であると再認識される。

私にとって初めての長崎訪問。同世代でもある参加者の皆さんと共に学びを深めることが出来たことに感謝し、「長崎を最後の被爆地に」との願いを実現し続けるため「考動」することを誓いたい。

記録写真集



事前学習会



広島派遣









長崎派遣









報告会





